
輪廻～廻る運命の輪～

因幡 悠

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

輪廻へ廻る運命の輪

【著者名】

【あらすじ】
因幡 悠

Z6877

【あらすじ】

俺と亨が出会ったのも、運命だったのかもしない

めぐらめぐら輪廻の世界へと、貴方を誘いましょう。

動き出した運命

俺と亨とおるが出会ったのも、運命だったのかもしれない
棗なつめと亨の出会いは小学三年生の時ときだつた。

亨がその時は転校してきたばかりで浮いていて、最初に話しかけた
のが棗だつたのだ。

それから一人はすぐに仲良くなつた。

それから八年経つた高校の入学式の朝

「おばさん、棗なつめ一階いっかい？」

「そうよ。いつも『めんね』、亨君とうくん」

「いやあ、好きでやつてるから良いんですよ」

軽快なリズムで階段を駆け上がり、勢いよくドアを開けた。

「お~い朝あさだぞ~！今日は入学式だあ~！~！」

いつもの声で棗の目が覚めた。

「おはよう、亨とう」

「おはよう。そら、早く着替えろ！入学式から遅刻しちまつぞ……」

「はいはい」

亨は六年前から欠かさず棗を起こしに来る。

今では家族の中に溶け込んで、たまに夕食も食べていたりするくらいだ。

「ワリい、待たせた」

「じゃあ行くか」

今日は高校の入学式がある。

棗は一人、果てない空を見上げた。

とうとう俺も高校生かあ

\$\$\$\$\$\$\$\$\$\$\$\$\$\$\$\$

校長の話が大半の入学式が終わり、棗達は深い溜め息をついた。

「この後どうする？棗」

「取りあえず家で入学祝いしようぜ！」

「棗～！亨～！」

そんな一人の会話に入つて来たのは、棗の幼なじみの水城みずきだつた。

「何々！？入学祝いすんの？ウチも入れてよ！」

「しうがねえなあ～、じゃあ家に帰るか！」

そんな三人の前に一人の男が現れた。

その男は黒のスーツ姿で、黒縁のメガネをかけている。

「本日は高校こうこう入学おめでとうござります」

と、その男が言った。

棗達は何となく嫌な雰囲気を感じ、そこから立ち去ろうと足を進め
る。

すると、その男に呼び止められた。

「貴方達にプレゼントがあります」

その男は小さな箱を取り出した。

「入学祝いにあなた方の前世へ連れて行つて差し上げましょう」

その男が呟く。

刹那 箱が開き、その中へと三人は吸い込まれた。

動き出した運命（後書き）

読めない漢字や要望などがあつまつしたら、お返事じいひがわ。

また、感想なども頂けるとありがたいです。

懐かしい景色

棗が目を覚ました時、辺りは全く見覚えのない景色へと変わっていた。

だか、そこは何故か懐かしく、居心地が良いと思えた。
と、同時に、恐ろしいとも感じた。

“ここは・・・何処だ？”

見回しても、亨達の姿はない。

棗は、その『懐かしく恐ろしい場所』に一人、存在していた。

“取りあえず亨達を探そう”

棗は歩き続けたが、亨達どころか町すら見つからない。
すると、頭の中に声が響いて来た。

『もう少し行くと、そこに町がある』

“お前は誰だ？”

『今は言つ事を聞くんだ。直に分かる』

棗はその声に導かれながら、町にたどり着いた。

『ほら、着いただろ？』

頭の中の声が言った。

「ああ。でもお前は一体誰だ？何故俺の頭の中から・・・
全てを聞く前に、邪魔が入った。」

「おい！リヴィじゃないか！！お前生きてたのか！！」

そう言つて嬉しそうに走つてくる男を見ながら、棗は意味が分からなくなつていた。

“何を言つてるんだ？コイツ？て言つた誰だ？俺はリヴィなんて渾
名はないし、死ぬような真似はしないぞ？”

「久し振りだな、ルシナ」

“？今誰が喋つたんだ？もしかして・・・俺か！？”

そう、その言葉は紛れもなく棗の口から発せられたものだった。
さつきから後ろに陰がある。

おそらくは亨が俺を見つけたのだらう。

そう思い、振り向いた。

だが振り向いた棗は、明らかに驚愕の表情を浮かべていた。

そこには、自分とそつくりの・・・いや、正確に言えば自分が20代前半位になるとこんな姿だらうと言つ雰囲気の男性が立っていた。

「誰だ！お前！？」

「俺の名はリヴィアンズ・アール。佐倉棗。お前の前世だよ」

そう言つたりヴィアンズ・アールと言う男性は微笑み、その瞬間、棗は倒れた。

ただ、意識が朦朧としている中で思った事は、『この世界は何かおかしい』それ一つだった

十五回の罪

この世界に来て一度田の田覚め

その田覚めは一度田とは違い、賑やかなものだつた。

「ねえねえ！リヴィが帰つて来たんだつて！！」

「 そうそう！しかもナツメとかいう男の子も一緒だつて！」

「

そんな女たちの声が聞こえる。

その声を聞いて、少し安心した。

しかし。

“ 今度は何処だ？”

棗は体を起こし、辺りを見回した。

「 気がついた？ナツメ君」

横から聞こえる女の声。

「 ・・・あなたは誰ですか？」

棗がその声の主に問いかける。

「私はミレイナ・クライン。中澤水城ちゃんの前世で、リヴィの恋人よ。ミレイナって呼んでね」

「 水城の前世・・・？」

「 そ。リヴィ呼んでくるから待つててね」

棗の問いかけに答えたミレイナは、リヴィを呼びに行つた。

暫くしてミレイナがリヴィと一緒に戻ってきた。

「 やつと田が覚めたか。大変だつたんだぞー、お前運ぶのリヴィが笑いながら言つ。

「 で、知りたい事は？」 いきなり核心に触れられる。

確かに棗はこの世界がどうなつてているのか。

何故自分がこの世界いるのか。

分からぬ事が山程あつた。

だから口から出た言葉。

「何故・・・？」

「それはまた漠然とした質問だなあ」

「何故・・・俺はこの世界にいる・・・・?」この世界は何なんだ?亨や水城は何処にいる?何故俺の前世であるお前が・・・リヴァインズ・アールが此処に存在する?何故・・・」

「ちょっと待つて」

リヴィイがストップをかける。

「いきなり色んな事を聞かれても、全ては答えられないからさあ・・・順番に聞いてよ」

棗はコクリと頷いた。

「まず・・・この世界は何なんだ?」

棗が不安そうな面持ちで、再び問い合わせる。

「この世界はお前の前世だ」

リヴィイの口から出た答えは、正直、理解出来ないものだった。だが、この状況では信じざるおえなかつた。

「じゃあ、何で俺は此処にいる?」

「ああー、それは多分彼奴に聞いた方が早いなー」

「アイツ?」

棗は疑問の表情を浮かべる。

「棗さんは私がお連れしました。」こちらの手違いで・・・ですがね」そう言つて現れたのは、棗たちに『入学祝い』と称し、あの箱をくられた黒縁メガネの男だつた。

「私は榊と申します。その姿では初めまして」

「?あの・・・榊・・・さん?手違いつてどうゆう意味で・・?」

「ああ・・・本当は梶那亨だけを連れてくる予定だったんですが、面倒臭いんであなた達も一緒に連れて来ちゃつたんですよ。手違いと言つよりは『面倒臭かったから』の方が合つていますね」
“おいおい・・・そんな事で俺は連れて行かれたのかよ! ”
棗は心の中で叫んだ。

だがしかし、一つ引っ掛かる所がある。

「何故・・・亨なんですか？」

それは当然の疑問だつた。

「彼は罪を犯したんですよ。正確には、『彼の前世』が犯した罪ですがね。それは棗さん、あなたにも関係が在ります。そして一番関係が在るのはリヴィさんです」

何を言つているのか、棗は分からなかつた。

だが、リヴィの憎しみに歪む顔を見て、棗の心の何処かでも、一瞬、憎惡の念が生まれた。

「その亨の罪つて何なんですか？」

「梶那亨は・・・いえ、亨の前世、ステイーラム・ハーツは・・・リヴィさんの家族を含めた千五百人の人間を殺したんです」

聞いた瞬間、胸がざわついた。

リヴィの顔も怖くて見ることが出来ない。

「そんな・・・」

これから俺はどうしたら良いんだ？

夢の中の現実

事実を知られた日から一日が経ち、リヴィの様子も落ち着いて来た。

でも 話しかける勇気が出ない。

迷いながら棗が辺りを彷徨いていると、リヴィの方から話しかけて来た。

「何か気になる事があるのか？」

棗は行き成り話しかけて来たリヴィに一瞬戸惑い、恐る恐る聞いてみた。

「俺がこの世界にいるのは・・・前世と関係があるんだよな？」

「ああ、そうだよ」

「じゃあ・・・」

言い掛けて口を噤んだ。

こんな事を聞いてしまって、リヴィの傷を抉らないだろうか？

戸惑っている棗の様子を横で見ていたリヴィが『何を聞きたいかは分かってる』と、棗の頭の中に直に伝えてきた。

「俺とステイーラム・ハーツの事だろ？』

棗は黙つて頷いた。

「・・・俺とステイーとミレイナは幼馴染みだつたんだ・・・特に俺とステイーは仲が良くて、一番の親友だつた。だが・・・」

そこまで話すとリヴィは一旦話を止めた。

とても辛そうな表情をしている。

そして憎悪の念も見て取れる。

何故だかは分からないが、棗も辛くなつた。

暫くしてからリヴィが再び口を開いた。

「・・・あいつは、ある日突然俺の両親を殺したんだ」
榎から話を聞かされ知つてはいたが、リヴィの口から聞くとやはり重みが違う。

感情が溢れる。

לְעֵמִים

いつの間にか糞の瞳から涙が零れ落ちていた。

・・・何で・・・お前が泣くんだよ

無理な笑みを浮かべ、リヴィイが棗に言った。

わが
生
ない
ても
悲しい
かよ

涙を拭つた棗は部屋から出て行こうとした。

「何処行くんだ？」

「……もう寝る……」

その夜、棗は夢を見た。

それは、今が子供の時の夢だった

『遊四ノ居』

“何だこの夢……誰だ……この声は……”

書かれてある前に

何言ひてゐるか

〔アリバウド、アーティスト〕

卷之三

卷之三

ヤガマの口にさし作にさるが生

「田代、矢張しハ力ニ

“そ二か・・俺は繩の中で、おまはなしてしるんた”

リビングルーム

川辺、音闇(こゑのやま)

噎せ返るような血の匂い。

その場にいるだけで息が詰まるようなな圧迫感。

棗はこの場所が何処だか把握出来た。

リヴィの家だ。

夢とは思えない程の生々しい感覚に吐き氣までも覚えた。

陰が写る。

そこに いる。

『それ』の顔がぼやけて見えないが、棗は顔を上げ問う。

『何故こんな事を・・・』

すると笑みを浮かべ 『それ』が言つ。

『『もう、何もかも飽きたんだ』』

『つつ・・・！』

心に憎悪の念が広がつていく。

『『だから全て 』』

なんだ？声が聞こえない？

そう感じた時にはもう遅く、今度は出口のない闇へと呑きこぼり込まれた。

そこには子供の姿のリヴィが立っていた。

呆気に取られている棗を見上げながら子供の姿のリヴィイが囁い、『どうしたの？オーライチャン』と尋ねる。

リヴィイは俺が誰だか分からないのか？

「俺の事が分からぬのか？」

『分かる』、棗』

そう答えた瞬間　　リヴィイは消えた。

そして背後から声が聞こえた。

金縛りにあつたように体が動かない。

『ただ、棗は分からぬ事が沢山あるでシヨ？』

「　ああ」

『何で分からぬのかナ？』

「そんな事俺に聞かれても・・・！」

『じゃあ教えてあげる』。棗はね、分からぬんじやなくて思い出せない・・・ううん、思い出したくないんだ』

思い出したくない？

何故思い出したくないのか、棗には分からぬ。

『どうしたら思い出せる？』

するといつの中にカリヴィイが田の前に立つていた。

『良イノ？思イ出シテシマツ』

優しい口調の様で冷たい声。

気を抜いたら何かに呑まれる様な不安を煽る。

『其レガドンナニ辛イ現実デ有ツテモ、後悔シナイ？血塗ラレタ過

去ヲ知ツテシマツテ苦シクナラナイ？』

「　ああ。俺は知らなければいけないんだ」

リヴィイがニヤリと不気味な笑みを零す。

『じゃあ付いておいで』。見せてアゲル』

そこまで言つと辺りの雰囲気が一気に変わった。

『最高の夢をネ
本当の底知れぬ闇。』

怖イ

「うああああああつ！…！」

ベットから飛び起きるとリヴィイが心配そうな表情で棗の隣にいた。

「リヴィイ

「大丈夫か？ 酷く魔されていたけど…？」

「とても怖いモノを見た…。おぞましい記憶を…。
恐怖に震える棗を見て、リヴィイが「そつか…悪いな」と呟いた。
「何でリヴィイが謝るんだよ？」

するとリヴィイは申し訳なさそうな顔をして言つ。

「それは…俺のせいみたいなもんなんだ…。一時、俺は憎
しみに染まつた記憶が強かつた…。そして多かれ少なかれお前の
中には俺の記憶の欠片がある。勿論、憎しみの記憶もな…。それ
がお前に同調したんだろう…。」

「…そつか」

すうつと心の中の疑問が消えていった。

だからここに来たとき、懐かしいと感じ、神に事実を知られ、憎
しみに駆られたのか。
窓から陽が差し込む。

「もう、朝だな。立てるか？」
リヴィイが手を差し出す。

「ああ。もう大丈夫だ」

\$ \$ \$ \$ \$ \$ \$ \$ \$ \$ \$

それから畳下がりになつた

「ところで、さあ。リヴィイ」

「ん？ 何だ？」

リヴィイが棗の言葉に振り返る。

「何でリヴィイは最初、俺の中にいたんだ？」

暫しの沈黙。

「う～ん・・・・・。じゃあめんどくさいけど説明すつかなあ」
そう言って面倒臭そうにリヴィイは話し始めた。

「まずは輪廻の関係性からだ。輪廻の意味は分かるよな？」

「・・・う～ん？」

真面目に分からなかつた。

「分かるよ・・・ナ？」

リヴィイの顔が怖い。

「リヴィイさん。顔が怖いよお～。てか、真面目に分からないしー」「はああああ～」

「・・・そんな明白に溜息吐かなくても・・・」

「りんね【輪廻】

「名・自サ変」回転する車輪がきわまりないよつこ、衆生が死後、
迷妄の世界である三界・六道の間で生死をくり返すこと。仏教の基
本概念。流転。・・・デスケド解リマシタ？」

怖い怖い怖い怖い怖い怖い！～

「解りました！～笑顔が怖いです！リヴィイさん！～！～

「・・・・・」

「ハハツ！おまつ、顔引き攀りすぎつ！～ブハツ！」

リヴィイが突然大笑いしだした。

「何でそんな笑うんだよ！」

「悪い、悪い。でも」

リヴィイはほんの少し真面目な顔をした。

「こつからが本番だ」

ゴクッ 棗は息を呑んだ。

「だけど・・・疲れたから今日はお終い」

「そんな終わり方ありかよ――――――！」

そんなワケでリヴィアの返せばれこよつて話せな預けになつたのである

「リヴィーーー！今日こそちゃんと教えてくれよーー！」

「う、うー、めんどくさい……」

あれから随分経つたがリヴィーは面倒臭がつて教えてくれない。

「だつて長いんだぞーー下手したらそれで二十四時間潰れ兼ねない

！」

なんて面倒くさい大人だろうか。

棗がそう思った時、ミレイナがやつてきた。

静かだが怒りを含んだ声で。

「リヴィー、貴方面倒くさい大人にだけはならないでね？」

その言葉が聞こえるとリヴィーは素早く部屋から出てきた。

「やあ棗くん。お待たせ」

その姿を見た棗は「……バカっぽい」と言い捨てる。

「ん、ーーーー。じゃあ話しますよつ・・・ー！」

『はあい』

返事が二重。

違和感を感じてリヴィーが後ろを振り返る。

「で、ミレイナは何でいるんだ？」

そこにはミレイナに問い合わせる。

「私も聞きたいからよ？」

真面目な答えが返ってきた。

半分無視しながら話を再開する。

「・・・んじや、輪廻については解つただろうから、次は記憶の関係からだな」

そう言つて話し始めるリヴィー。

「人は誰しも前世の記憶を持つている。だから初めてい行つた場所でも懐かしい雰囲気を感じたりする事がある」

「あつ！確かに一、二回そんな事あつたなあ」

話を続ける。

「そしてお前は前世の因果により、まあ殆ど偶然みたいな形でこの世界にやって来た。その時お前の中にあつた前世の記憶が干渉して、俺の人格を目覚めさせた。だから頭の中から声が聞こえたんだ。省略するところな感じだな」

そして最後に、「ミレイナ達も同じくだ」と付け足した。

「だから俺たちは本当だと、もう死んでいたんだ」

「でも榊さんが調整して今まで生きていた事にしてくれたの」

「・・・そう、なんだ」

「まあでも暗い話は抜きにして、色々分かつたか?」

リヴィが励ますように問いかけた。

「うん。ありがとう」

微笑む。

穏やかで平和な時間が流れていった。

「あとは俺の友達とか紹介するから」

暖かい。

そんな時だった。

「あら、そう言えば水城ちゃん。今こっちの世界に来たみたい」と、ミレイナが言った。

「えっ! ? でも、水城は俺と一緒に飛ばされたのに何で今更?」

「多分気を失つてて、時間断層に引っ掛けたんじゃないかな? 気

を失つてると時間断層から出られないから」

「じゃあ私、水城ちゃんを迎えに行って来るわね! 近くに落ちたみたいだから、直ぐに戻るわ」

そう言うと、ミレイナはスッと消えてしまった。それから一分後。ミレイナが水城を連れて戻つて來た。

「だだいま」

嬉しそうなミレイナの隣で不安げな表情を浮かべていた水城が棗の姿を見て、走り寄り、抱きついた。

「水城、お帰り」

今にも泣きそうな水城の頭を撫でながら、棗が微笑んだ。

「棗え～、怖かつたよお～」

泣きじやぐる水城。

「もう、大丈夫だからな」

再び頭を撫でている棗の表情は安堵に満ちていた。

水城が「」ちりの世界に来てからは、平和な時が流れた。

「水城ちゃん、そつちのジャム取つてくれるー？」

「はーい」

今日はHalloweenで水城とミレイナが菓子作りをしている。

「久しぶりだなー、ミレイナの菓子」

リヴィは楽しそうに話している。

「なあ棗。水城ちゃんて料理上手いの？」

「うん」

「ふうん。じゃあ水城ちゃんてお前の彼女なの？」

「違う。てか、どにからそんな発想が出てくるんだ」

「だつて俺とミレイナが恋人なんだから、お前等が恋人同士であつても可笑しくないだろ？前世だし」

「そんな感情は無いと思つよ思つよ。俺たちは幼馴染みだし」

「そりゃ俺たちだつて同じや。でも恋人になつた」

「リヴィイ達と俺達は違つだ！」

「まあまあ～」

「こんな事を話していく、何が楽しいのだ？！と轟は思つた。

「楽しいも何も、」この時間を大切にしなくちゃな

「おまつ～心読んだな！」

「まあな。そんぐらい易い

「でも・・・・・」

“この時間を大切にする”

つて、どうゆう意味だ？

「平和な時間は限られている。つて事だよ。お前等の世界では命が失われ、事件が起きたとしても、テレビの中での出来事であつて、他人事のように思つている。でもこの世界ではお前等の世界より死が身近にある。それはお前も分かつてゐるだろ？だから平和な時間を大切にしなきゃな。第一にこの平和だつて仮初めに過ぎない」

「分かつてゐる・・・でも分からぬ」

「良いや～・・・嫌でも後で実感する・・・ま、Halloween
」を楽しもうぜ～！」

「うして轟達が話している間に菓子が出来上がつた。

「棗ぐーん、リヴィー、出来たわよーーー！」

『はーい』

応えたのは棗とリヴィではなく、一人の男性だった。

「おおー！クラウス達来てたのかーー！」

『よおー。』

棗の顔には「？」が浮かんでいる。

「じゃあ棗、ここからも後で紹介すっかり

「分かった」

棗が応えるとほぼ同時に、奥で準備の出来た水城とミレイナが「早く！」と、少し怒鳴り気味に言つ。

「あつー、ゴメン」

棗達は大急ぎで走つて行つた。

\$\$\$\$\$\$\$\$\$\$\$\$\$\$\$\$

『『セーの、Happy Halloween』』

大きなかけ声でHalloween partyが始まった。

「じゃあ、お待ちかねの一人の紹介な！」

そう言ってリヴィがさつきの一人を指差した。

「まずは兄のルシナ・クラウス。こいつは俺と棗がこいつの世界に来た時に最初に会ったやつだ」

「それとこいつちは弟のルシン・クラウス。ルシナの弟な。こいつは初対面だな」

兄のルシナは切れ長のスカイブルーの瞳。
背も高い。

薄水色の長い髪を後ろで一つに束ねているが、鬱陶しい感じはなく、
むしろ爽やかな雰囲気だ。

弟のルシンも、切れ長のエメラルドグリーンの瞳で長身。
薄水色の長い髪は束ねてはいないが、手入れが行き届いている為か、
兄同様、爽やかな雰囲気を醸し出している。

「因みにこいつら双子だぜ。一卵性のな

確かにルシナとルシンは瓜二つだった。

『これから宜しくな、棗！』

二人が手を差し出す。

「宜しく

棗は笑いながら握手をした。

「こつら言い奴だから仲良くなとくと良こそだ」

「しかもモテモテよ~」

皆の笑い声が響く。

棗はこの時がずっと続けば良いと思つた。

その先に待つている運命も知らずに

。

平和つて・・・ナニ?

リヴィイが言った“この時間を大切にする”といいつ言葉。
その意味が棗はやつと理解出来た。

夢か現実かは分からない。

また夢なのだろうか？

朝起きたら世界が血色に染まっている。

こんな光景を一体誰が見ただろ？

町の者は皆死に絶え、自らも傷を負っている。

すぐ傍には男女の骸。

誰だか分からぬ2人の姿に父と母が重なる。

『父さんつ！－母さんつ！－』

棗自身が悲しい訳ではなく、ましてや本当の父親でも母親でもない。
だが、感情の昂りを抑えられない。

誰か助けてくれ！

気が狂つてしまつ！

心から助けを求めた。

自分の後ろに気配を感じた。

あの嫌な気配。

“あいつが・・・ステイーラム・ハーツが居る！”

動けぬまま風きり音がした。

“ヤバイつ！

そのまま棗は気を失った。

気を失つたまま、とても長い時間が経つたのが分かつた。

リヴィ達が棗の周りに立ち、心配そうに覗き込んでいた。

「良かつたわあゝ・・・私たちがいくら呼んでも起きないんだもの。心配したのよ？」

「何か……あつたのか?棗」

リヴィが問い合わせる。

「また・・・恐ろしい夢・・・・・・」

「どんな夢だつた・・・?」

「言い表せないんだつ……。なんて言つて良いのか」

するとリヴィが棗の額に手を当てた。

「ちよつと頭ン中見るぞ」

「そんな事出来んの？」

「ああ。」この前神に教えてもらひたんだ。あつ！でも一種類やり方があるケドどうする？」

「一種類？」

「一 つは俺が頭の中見んので、もう一 つは俺が棗と一緒に化すんの。どうす？」

棗は少しも躊躇う事無く即答した。

「頭の中見の方！ だつてさあ！ リヴィと俺と一緒に化すなんて気持ち悪すさうじやんかあ！」

「…………やうかい」

苛立ちを含んだ表情で言った。

「でも・・・多分お前は気持ち悪いだろうが、俺と一緒に化す方が恐怖は少ないぞ」

「どういふ事だ？」

リヴィがフウと溜め息をつく。

「俺とお前が一体化する場合は、まあ、お前は気持ち悪いだろうが、俺だけが記憶を探るから、恐ろしい夢を再び見なくて済む。だが、頭の中を見る場合は記憶を呼び起こして、俺とお前の両方が恐ろしい夢を見る事になる。俺は恐らく自分の過去だろうから、今更何とも思わないが、お前はもう一度怖い思いはしたくはないだろう？ 少しの不快感と大幅な恐怖。お前ならどちらが良い？」

棗は酷く困惑った。

あの恐ろしい夢をもう一度

体中を寒気が奔る。

恐怖が込み上げてくる。

「嫌だ・・・・・。あの・・・恐ろしい夢はもう見たくない・・・・・！」
ヴィ・・・・頼む」

「分かった。少し眠つてろ」

そうコヴィが言つて、意識が遠退つた。

『これで良し』

棗とリヴィが一致した。

『・・・・・で、ミレイナ達はいつまで見てゐつもつだ?』

『『だつて棗が心配じやんか』』

とクラウス兄弟が言つた。

『集中できん！外出でろーー！』

そう言われ、ミレイナ達は外に追い出された。

『じゃあ、静かになつたことだし・・・・・』

と言つて、意識を集中し始めた。
リヴィの中に記憶が流れ込む。

あの恋々しい記憶が

“自分の過去だつから、今更何とも思わない”

やつ血こぼしたが、やはり辛いものがある。

『はあ・・・とつあえず終了』

額から汗が滲み出していく。

「リヴィー・・・・もう入っても良い?」

ミレイナがドアの外から呼びかけてきた。

「もう良い。終わったから

「棗君、こいつ田を覚ます?」

「もういい。一分したら起きるだろ」

それから一、一分して棗は体を起した。

「終わったよ、棗。あれは多分・・・ステイーに町を襲われた時の

記憶だらう」

「やつか、ヽヽヽ

棗の表情が少し、曇っている。

「どうした? 棗

「・・・リヴィーは・・・今まであんな重い過去を背負つて来たのか?
あんなに恐りしへ記憶を・・・」

「・・・・・ そうだ・・・

「俺、何も分かっちゃいなかつたんだな・・・」

「良いんだよ。棗はほんとなら知りないままで良いことじだつたんだから」

優しい言葉に安堵を覚える。

「でも・・・平和な時間はやっぱり長くは続かないんだな・・・」

リヴィイが呟いた。

『チリン、チリーン』

遠くで鈴の音が響く。

「まひ、お前にも何故か・・・分かるだろ?」

言つてこる事の理解は出来る。

「こJの鈴の音は、朝がいつも持つてゐる鈴の音だ」

「でも、こJの鈴の音、一重に響いてるぜ?しかもこの鈴はステー
も持つてゐる」

胸騒ぎがして、急いで外に飛び出した。

その瞳に映る真実を受け止めきれないまま

戸惑いの再会

瞳に映つた“セカイ”はさつきまでの賑やかな明るい“世界”とは全く違う、棗の夢が実際に現れたような光景だつた。皆が悲鳴を漏らす、まるで地獄絵図の様なセカイそこに棗とりヴィは呆然と立つていた。空までもが真紅に染まつたセカイ。

「何なんだ・・・」これは！

思わずリヴィの口から悲鳴にも似た叫びが迸る。

「何つてそりゃあ・・・」

チリン、と言つ鈴の音と共に声が聞こえてくる。憎悪で胸の奥が搔き鳴らされるような感覚。

この感覚は

『ステイー・・・』

「久しぶりだなあ・・・リヴィ。何年振りかあ？ほら、お前も挨拶しろよ」

そつとステイーは自分の後ろに目を遣つた。

「亨ー？」

そこに在つたのは紛れもない亨の姿。

「初めましてリヴィさん。逢いたかったよ……棗……」

「亨……」

その時、大きな爆発音と共に真紅の空に亀裂が走った。

「リヴィさん……棗さん……」

亀裂の間から顔を覗かせたのは榎だった。

「榎さん……」

「榎、どうなってるんだー?」『れはーー』

「すみません。こちら側のミスで侵入を許してしまいました」

榎が深々と頭を下げる。

「今すぐ取り押さえますので、少し下がつていて下さい」

やつらが卑いか、ステイーと『』が取り押さえられた。

「つたぐ、折角の再会を無しにしゃがつて」

ぼやぼやと呟いていたステイーを尻目に榎がもう一度頭を下げる。

「本当に申し訳ありませんでした……。なんとかお詫びをして良いのか……」

「……え……それより榎さん、亨と話す』とは出来ないんです

か？」

棗が問い合わせる。

「難しいでしょうし、危険です。棗さんを危険な目に遭わせるわけにはいきませんから・・・」

「大丈夫です。亨は危害を加える存在じゃないですから」

「でも・・・」

一瞬戸惑つたようにリヴィと顔を見合わせた榊は、リヴィが首を縊に振るのを確認してから棗に言った。

「良いでしょう。しかし、危険だと感じたら、直ぐに戻つて来て下さい。これが梶那 亨との面会の絶対条件です」

「はい」

返事をしてから走り出した。

「亨・・・少し話し出来ないかな？」

「・・・良いよ。でも別の場所で」

「うん。・・・榊さん、別の場所に移ります」

榊にすれ違ひざまに知らせた。

「はい・・・」

未だ真紅の残るセカイの中を進み、二人はリヴィの家へと入つて行つた。

「改めて棗。逢いたかつたよ」

「うん・・・」

「今までずっとここにいたのか?」

「ああ・・・」

「そつか」

亨、何だか雰囲気が違う。
気のせいいか?

別人みたいだ

棗が違和感を感じるのも無理はなかつた。

亨ならこんな状況に立たされていればすぐに助けを求めるはずだ。

「・・・なあ、亨。お前は・・・誰だ?」

「はつ?」

困惑の表情を浮かべる亨。
だが明らかに動搖している。

「何言つてんだよ、なつ・・・」

「だからお前は誰だつて聞いてるんだよ

「俺は俺だよ？」

「いや、違う……」

二人の間に沈黙が続いた。

「勘の鋭い奴だよなあー、佐倉 粟。俺が居ることはあいつら気づかなかつたのに」

「……やつぱり貴方だったんですね。ステイーラム・ハーツさん

「ああ。あつちのは人形。偽物だ。今頃あいつらもそれに気づいてるだろ？」

その頃、サラサラと崩れ散つていくダミー人形を田の前にして、リヴィ達は驚愕の表情を浮かべていた。

「リヴィさん、これは……？」

「粟が危ない……急ぐぞ榊！」

\$\$\$\$\$\$\$\$\$\$\$\$\$\$

「リヴィ達、こちらに向かつてゐみたいだよ」

「そんな事はどうでも良い。亨は何処だ！」

「……だから田の前にいるじゃないか」

「何言つてゐる！お前は　　」

その時棗はふと気が付いた。

実体化の方法は一つではない事に

「と云つては、お前が本物に夢・・・？」

「お前が・・・亨?」

「やつと氣付いたんだ? 実体化の方法が一つじゃない」と

「・・・」

その時棗の頭には、以前リヴィに言われた事が蘇つていた。

\$\$\$\$\$\$\$\$\$\$\$\$\$\$\$\$\$

「実体化の方法は様々だ。勿論目に見えないものもある。最初に言つとくけど、身体の元、つまり棗が『オリジナル』で、借りてる側、俺が『コピー』って呼ばれるからな。じゃ、話の続き。まずは一人。つまり、俺とお前が同時に存在するタイプ。次に一人。これは一体化して、どちらかが表に出るタイプ。だから頭の中から直に話せる。どちらが表に出ても大丈夫。その次は幽体。オリジナルこれだと元の方しか表には出ない。オリジナルは幽体にはなれないからな。つまりは俺が幽体なんだよな、悲しくも・・・で、あとまあ色々あるけど、主なのは解つただろ?」

なんて長い話を聞いた。

「そんな馬鹿な・・・」

「亨は中で寝てるよ。呼んでも良いが、氣絶してるよ?」

「・・・何が目的なんだ?」

「お前等に危害を加えるつもりはないよ。あの真紅の空だって幻だ。
俺は只、リヴィに会いに来ただけや」

「だったら何故！？リヴィが苦しむ様な事を一親友だつたんでしょ
う！？」

その時辺りの雰囲気が一気に変わった。
冷たい闇。

以前見た夢の様に、恐ろしさを纏う。

「お前に・・・お前如きに何が分かる・・・俺の痛みも、アイツ
の苦しみも知らないお前が！」

背筋に寒気走る。

「ツクツク・・・俺を怒らせない方が良いよ。俺は気紛れだから、直
ぐに気が変わるかも知れないからね？」

遠くから足音が聞こえる。

「そりそろ潮時か・・・」

勢いよくドアを開け、入ってきたのはリヴィだった。

「棗！大丈夫か！？」

そしてステイーを睨みつける。

「お前・・・どうでもつづもりだ！」

「別に危害なんか加えちゃいないぞ。話をしていただけだろ?」

「ううう……」

「じゃあなリヴィ、佐倉 粂。今度は寧に会えると良いなあ?」

「そう言つて去るのとするステイーの前に神が立ちはだかる。

「待ちなさい、ステイーラム・ハーツ。逃がしませんよ……。貴方を拘束します」

「クツ! 神い……お前にや俺は捕まえられんよお……」

「何を言つます!」

「ああーばよ」

「待ちなさ……!」

その時にはもうステイーの姿は霧となつて消えていた。

「申し訳ありません……! 私の不手際で糀さんを危険な目に遭わせてしまつて……。Sandy dollの存在にも気付かずに……! あの二人の特殊能力がそれ『Sandy doll』だと知つていたのに……!」

「大丈夫ですよ。危ないと言つたつて危害は加えられてませんから。ね?だから頭を上げて下さい」

「そーだよ榎。お前のせいじゃない。俺だつて一緒にいたが分からなかつた」

「でも」のままではいつ怪我人が出るか分かりません。^{しきみ}榎を呼びます」

「榎を呼ぶ・・・か。事は重大だなあ？」

「えつー!? それって誰ですか?」

「棗・・・突つ込むのはそこじやない!」

「でも・・・」

そつ言つてリヴィイが天を仰ぐ。

「榎を呼ぶたあ、一刻を争つ事態つて」とか・・・」

束の間の休息

「なあ・・・お前気絶なんかしちゃいなかつただろ?俺が呼んでやつたのに何故出て来ない?亨」

そう言つてステイーラム・ハーツは空き家の中の人影に問いかける。

「五月蠅い・・・。」

返答をしたのは棗の親友と呼べる存在・梶那 亨だった。

「俺が出ても棗と水城を混乱させるだけだ・・・。それに出たら可笑しなつちまつのは俺の方だ」

そう言つた亨に対し、ステイーは不敵な笑みを浮かべる。

「かもな?」

「・・・お前も放つてはおけない」

「そりか?でもよお、どうすんだよ?佐倉 棗は?お前の大好きな親友なんだろ?失うぜ・・・俺みたいに」

真剣な面持ちの亨に少し呆れたような表情でステイーが言ひ。

「だとしても敵に回る。それがアイツ等の為なら・・・仕方ない」

「・・・お前にそんな考えを持たせたのは、俺の記憶の欠片を見たからか?」

“申し訳ない”そんな表情。

「確かにステイーに影響を受けたかもしない。でも敵になるかを決めるのは、俺のステイーラム・ハーツの部分ではなく、梶那 亨の部分だ」

強い意志を掲げる瞳。
後悔など、微塵もない。

「お前のそつゆう所、俺にそつくりだな？」

馬鹿だと言つて微笑むステイーの顔には、孤独から抜け出した安心感が滲み出していた。

「でも・・だから知つている・・・」

亨の少しきれない表情。

「・・・お前の苦しみ、痛み、悲しみ、絶望、焦燥、惑い、全ての記憶、想い。嫌になるよな、こんな事。本当は誰よりも平和を望んでいるのに・・・」

注意して聞かなければ聞き取れない程の小さな声。

泣きだしそうな声。

その様子を見ながらステイーが言つた。

「後悔しても遅えんだ。今更戻れないし、止まれない。進むしかな
い」

力強い声音に掠れそうな声音は救われた。

「 そ、うだな・・・ ど、んなに恨まれよつと、俺たちの真意を知る者は
い、ないんだしな」

悲しい事だよな、と一人で口にした後、亨とステイーは空き家を後
にした。

\$

ざくざくと砂を踏む音が遠くから聞こえてくる。

「 俺を呼ばなきや いけねえなんて、何やつてんだよ 榊は・・・」

一人砂の上を歩きながら、落胆の表情を浮かべる者がいた。

「 でも兎に角あつちに着かなきや なー。・・・ 鳴呼、面倒くさいー。
でも行かなきや 榊怒るもんないー」

よし、もう一踏ん張り。

そんな事を思いながら、男は歩いて行く。
まだ遠い道程を

\$

「 あ、あ、一、遅い！ 何故櫻はこんなに到着が遅いんですか！ ！
！」

苛立ちを隠せない様子で彷徨く榊。

「 まあまあ榊。 本部が遠いんだから仕方ないじゃないか？」

リヴィイが宥める。
が、無駄だった。

「違います！ 榻はいつも徒歩で来るから遅いんですよー？ もつと有効な移動手段があるのにー！」

「「めんな榎。 僕間違えてたよ」

「分かれば良いんですよ、リヴィイちゃん」

榎がにこやかに応える。

次の瞬間、勢い良くドアを開け放ち入ってきたのは榎だった。
なんて間の悪い男だろうか。

榎に鉄拳制裁を喰らつたのはいつまでもない。

「痛いなあー！ 何すんだよ榎！！」

「何故か分からぬのか？」

ゆらりと榎の体が揺らぐ。
立ち込める黒いオーラ。

「うん・・・。」「めん。分かってる。許して？」

「嫌だ」

この状況をどうしたものか？
リヴィイは考えていた。
そして思い付かなかつた。

「…………あのむ、IJの状況下に置かれてる俺はどうしたら良いの？」

榎は未だ黒いオーラを放ちながら微笑んだ。
飽くまで丁寧な口調で。

「すみませんリヴィさん。お手数ですが榎さんを呼んできて下れ。」
その間に然るべき対処をしておきますので」

「…………うん」

それから暫くしてリヴィが榎を連れて戻ってきた。

「悪い榎、遅くな」

そこには明らかに落ち込んだ榎がいた。

「すみません榎さん。お呼び立てしてしまって。」

榎が榎に軽く会釈をする。

「いえ。どちらが榎さんですか？」

「ええ。紹介します。こちら私の双子の兄で、機関のトップの一人・
榎です。いつもは頼りないですけど一応強いので安心して下さい」

すると二つの間にか回復していた榎が榎の隣にいた。

「君が榎くん？初めまして、榎です」

満面の笑みを浮かべ、棗に手を差し出す櫻。

「宜しくお願ひします」

棗も笑みを浮かべた。

「リーガイも久しづり。お前が死んで以来会っていないもんなあ？」

「やうだな」

「んで、今はどんな状況なんだ？」

「ああ。今は」

* 樺の話が長いので早送り*

「 とゆづ状況なんだ」

「 やうか。到頭ステイーが、ねえ」

棗とリーガイもコクリと頷く。

「 といひで」

更に真剣な面持ちで、櫻が切り出す。

「 何で榊つて俺にだけ微妙にタメなの？」

何故そこでその話題なのか。と、一回は固唾を呑む。

「兄弟だから。櫻に敬語を使つ意味がない。価値がない。殴るつか？」

「こまサラッと酷い」と言つた。価値がないとか、殴るつか?とか・・・」

「ええ。当たり前です。」

その次の瞬間 デアが勢い良く開いた

「櫻さんか来てるって本物!~?」

入ってきたのはレイナだつた。

「おーー!!レイナ久しづびり!元気 では無かつたな」

少し苦笑いを浮かべる櫻。

「ねえ、やつ言えばリヴィ」

棗が少し離れた場所でリヴィに話し掛けた。

「嫌だつたら答えなくとも良いんだけど」

「うん」

「じつじてコガヴィヒレイナさんて死んだの?」

「あーそれな。いやあ、ステイーを捜索してる時に不意打ちでス

ティーの当時の部下達に襲われてな

「やつか

「それより明日は大変だぞ！多分皆で檻の歓迎会やんだろう。榎の時はバタバタしてたから榎も一緒に」

「そんな事してると暇あんの？」

「潤滑油だよ。潤滑油。お前も手伝えよー。」

「つたくしょうがないな」

「この日は束の間の休戦日。皆が笑い合つ穏やかな日々だった。

不協和音

「ねえーー！そつちのお皿取つて！棗ーー！」

水城達が料理の準備をしている。

「何か・・・デジヤヴー」

秦は一人そんな事を考えていた。

「てカリヴィ、潤滑油とか言ってたけど、普通にドロドロしてた方が楽な気がする」

『僕等もそういふ

なー・・・・・！？ルシナさん！？』

二
は
あ
し

そこには笑顔のケテウス兄弟が立っていた。

なんかさあー 楽しいのは好きだけど流石に疲れたー 。。。

トルシナ。

「だよなあー、色々と疲れてるから、休みたい」

すると後ろからぬうと手が伸びて、クラウス兄弟の首根っこを掴ん

だ。

『なあつー?』

「お前等少しば手伝え『ララアー・森もなー』

リヴィだ。

リヴィイ、血管浮いてるよー。

その言葉を胸に収納し、リヴィの言葉に従つた。
何故ならクラウス達が必死にジエスチャーで『逆らうとヤバい』と
伝えてきたからである。

「まあ、どうちこしう面倒くさいこんだからいつかな」

そう呟いて後を追つた。

\$ \$ \$ \$ \$ \$ \$ \$ \$ \$ \$ \$ \$

リヴィに言われて料理をしていると、水城が俺を見ているのに気付
いた。
何で見てこらんだらう?
不思議に思った。

「……なあ水城、何で俺の事をひきりまつと見てるの?」

思わず聞いてしまつた。

「えつ・・・一せつ、り料理上手いなあと思つて、な

「まあ、ちつさい時から教え込まれてたからな。この程度だつたら

別に。水城も上手いじゃんか

「やうかな？」

水城は嬉しそうに笑いながら、料理を運んで行った。

「あいや あお前の事好きだな

「えつ？」

行き成りの声に後ろを振り向く。

「何だリヴィーか

「何だとは何だよーお前等さつき愚痴つてただろ?」

「えつ、バレた?」

「当たり前だ」

リヴィーは少し怒ったような素振りをして見せた。

「てかわあ、氣のせいかも知れないけど、前にもこんな事あったよな?」

「うん? ああ、Halloweenパーティーの時か?」

何で疑問系なんだよ。

「そつかー多分そうだと思つ。で、何で今日パーティーしなきゃな

「だからこの時間を大切について前にも言つたろ？」

「だからこの時間を大切について前にも言つたろ？」

「？」

疑問符疑問符・・・。

「俺は一回死んだから分かるんだよ・・・。時の大きさ、どんなに
悔いがが。やりたい事が沢山あつた。彼奴にも痛みを分からせてや
りたかったのに・・・。だから時間は大切に、有効に使わなきゃ
ならないんだ。無駄にしたら勿体ないだろ？」

「・・・そつか」

生きた証を残さなくちゃならないんだ。

「そうさーだから」

遠くでミレイナ達が一人を呼んでいる。

「今日もパーティーって事さーーー」

明るい声が響く響く。

その響きはやがて様々に入り交じり、不協和音となる

全ての元凶

何故？ナゼ？なぜ

？

分からない。

理解できない。

昨日まで穏やかだったのに。

穏やかだった 築なのに。

何故今はこんなにも荒れている？

あのパーティーの後、亨が来なければ。

彼奴等が来なければ良かつたのに。

何故今は皆怪我を負っている？

全ては彼奴等のせい。

「何でこんな事をするんだ！」

叫んでも只、嘲笑するのみ。

彼奴等さえ来なければ

\$ \$ \$ \$ \$ \$ \$ \$ \$ \$ \$

昨日までは休戦日。

皆一様に団欒を満喫していた。

そして次の日、行き成り彼奴等が現れた。

彼奴等は言った。

『やるならば最後まで』と。

彼奴等は嘲り、笑った。

血の海の中で。

彼奴等は鳴いた。

『心が痛い』と。

何故泣く？

何故お前等が傷付く？

俺には解らない。

泣く位なら何故傷付ける？

呆けていた俺の意識は、リヴィによって現実へと引き戻された。

「棗！呆けてる場合じゃない！早く俺の後ろに回れッ！」

首根っこをグイッと引っ張られ、リヴィの後ろに回された。
直後襲い来る衝撃。
戦いの最中だった。

「砂つ！？」

「知ってるだろ！？ Sandy dollだよ！！」

額に汗を滲ませ、怒鳴り氣味に言つ。

「お前も早く応戦しろ！－！」

困つた・・・。

「俺は特殊能力は使えないぞ！？」

特殊能力についても、以前リヴィから教わった。

「この世界に住まう者は、誰しも特殊能力を持つ。だがそれはこの世界の住民特有のものであり、前世・来世は関係しない」

確かに教えてもらつた筈だ。

「そうだ。そう教えた。でも、お前達の世界ではの話であつて、こちらの世界に来れば前世・来世であろうと特殊能力が使えるんだよ

だから早く応戦しろ。

と言いながら、再び防御体勢に入る。

「水舞龍！水壁の舞！！」

「すいぶりゅう？」

「そつ、水舞龍。唱えれば水龍が現れるから。さあー唱えろーーー！」

「てか最後の水壁の舞つて何！」

「技の種類だよ！次は剣の舞だ！行くぞーーー！」

「あつ、はい！」

思わず敬語になってしまった。

『水舞龍！剣の舞！』

唱えると、リヴィと棗の前に巨大な水龍が現れ、剣の様に鋭く変化し、亨とステイーの方向へ飛んで行つた。

激しく砂を巻き上げ、必死に防御する亨とステイー。

何でだよ・・・。

抵抗なんて無意味だろ?

何故お前はそちら側に居るんだ・・・?

亨

声なんか届く筈がない。

叫びすら悲痛の内に消えて行く。
すると直後で砂を巻き上げる音が聞こえた。
後方からの攻撃。

「やばつー。」

避けられない。

「片割れの翼 防」

それは突然の声によつて防がれた。

「・・・ありがとな、ルシン」

「なんの」

微笑むルシン。

「あれがルシンさんの特殊能力?」

「そう。片割れの翼 防。防御専門の特殊能力だ。因みにルシナ
は片割れの翼 攻。攻撃専門だ」

凄い。
強い。

遠くでは榊達も闘っている。

榊は手から炎を放ち、榊は雷の鳳凰を操っている。

「榊は猛火。その名の通り。榊は雷鳥。雷の鳳凰を喚び出す事が出来る。」

榊の攻撃が亨とステイーに当たった。

「ツツ・・・！」

ドサッと鈍い音がして、一人が倒れる。

「ステイー・ラム・ハーツ及びに梶那 亨。貴方一人を拘束します」

以外と呆氣無く闘いは終わりを迎えた。
すると気が抜けたのか、体から力が抜けて行く。
でも、何処か違和感がある。

それは言葉では言い表せない妙な感覚で、何かが腑に落ちない。
言わなければならぬ。
聞いて確かめねばならない。

「・・・一人はどうしてこんな事をしたんだ」

突然笑い出すステイー。

「フツ・・・クフフ・・・・。どうしてかだつてエ？なら教えてやる
よ。佐倉 粣え！お前等が犯してきた罪を！…俺の」

一緒に喜も呟く。

『俺達一人の苦しみを！－！－！』

また逢える日まで

犯してきた罪とは一体どれ程のものであるかは計り知れない。
罪を犯した記憶も無い。

だが、二人の言葉が偽りではない事は分かる。

『青空の下、我行かん。行く先に親とて、既に有らざ

スティーが口にした言葉。

圧迫感に苛まれる。

『紅蓮の砂漠は世界を紅く染め上げ、復讐へと誘う』

それでも未だに状況を飲み込めない。

「これがさあー、俺の親が死ぬ時に、俺に残した言葉だよ

クスクスと不快な笑い声をあげる。

「どう言つ意味か解るか?」

棗達は沈黙する。

「これはな、『この青い空の下をお前が何処まで歩いても、もう私達は居ない。血で紅に染まる砂漠を歩いて行けば、復讐の元へ導かれる。』って意味なんだよ

“それで何処に辿り着いたと思つ?”と尋ねる。

「リヴィ、お前の元だよ」

激しい動悸。

「まさ・・・か？」

「わつ。お前の両親が俺の親父達を殺したんだよ？」

棗の心臓が潰れそつた程に鼓動打つ。

苦シイ。

息ガ出来ナイ。

デモ、コレテ全テガ繫ガッタ。

「だから俺の父さんと母さんを殺したのか？」

「そうだよ」

「何故町の人達まで傷つけた！何故！？」

「前からお前の事、大嫌いだつたんだよ！だからお前に連なる者を、全て排除してやつたんだ！それにアイツ等は全員政府機関の奴らだ！親父達を殺した、『Six road police』のな！いくら反政府組織だからって、殺されるような真似、してなかつたのにー」

違う。

本当は違う筈だ！
分からぬけれど、何かが違うんだ。

棗の心が激しく叫ぶ。

その時だった。

亨が涙を流したのは。

暫しの静寂が訪れ、世界は静まり返った。

リヴィも一呼吸置いて話し始める。

「なあ、ステイー。本当は・・・違うんじゃないのか？」

「何が・・・？」

「本当は怨みなんて無かつたんじゃないのか？」

「いいや。怨みはあつたさ。『Six road police』も憎くて堪らなかつた！でも・・・でも！お前と・・・お前達と一緒にいる事で、消えてしまいそうで恐かつた！お前の両親や町の人には優しくされる事で、出来ないつて不安だつた！失う事が恐くなつた！だからやるなら早くつて・・・！俺は憎まなければならぬ！自分の親を殺した奴らを！–それはお前の親であつても同じだつた・・・！だから・・俺はやつた」

「・・・・・俺はさ、理由を知つたからつて許せるほど、器のデカい奴じやないんだよ」

するとステイーは申し訳なさそうな、悲しそうな笑みを浮かべる。

「そうだよな・・・お前も同じだもんな・・・？でも知つておいて欲しかつた・・・・・」

「ステイー……ありがとな。それと……」めん

ステイーが首を横に振る。

「良いんだ……。最後に伝えられて良かった！本当に『めんな・・・。ありがと』…ずっと一緒に笑つていらしたら良かったのにな……！」

最後は涙しながらも笑顔だった。

きっとステイーはこれで満足だったんだ、と、棗は思った。
「だから……。
「だから亭も……」

「ではリヴィさん。棗さん。ステイーラム・ハーツ及びに梶那 亨を拘束します」

え……？

「とつ、亨も連れて行くんですか？何で亨まで？」

「ですが棗さん……ステイーラム・ハーツに連なる者は拘束しなければなりません」

「そんな……」

その時、口を開ざしたままだつた亨が、棗に歩み寄つてきた。

「棗……多分こいつなる事は必然だつたんだよ？」

半分諦めたような瞳。

「だからって、お前が行く必要はないだりつー？」

ステイーと同じように、亨は首を横に振った。

「これは俺の罪だ。それに例え今逃げたとしても、決して逃れられはしないだろう。だから俺は行くんだよ。俺の罪を償いに」

「ではそろそろ」

榊の言葉に足を進める一人。

その一人の前に、いつか見た時間断層が現れる。

「亨・・・」

もし・・・もしも俺達がこんな立場ではなかつたら、ずっと一緒に友達でいられただろうか？

「亨！もう逢えないのかー？」

軽く微笑む亨。

「大丈夫。現世でも逢えたんだ。来世でも逢えるさ。だからさ、時を越えてまたいつか

「亨！ーー」

遠くから水城も駆け寄つて來た。

「亨行つちやうひつて……」

「なあ？水城。棗を宣しくな……。コイツは水城がいないと駄目だからね」

「うん……また逢える事、願つてゐる……」

最後に亨は満面の笑みを浮かべた。

「じゃあなー棗！」

涙か止め処なく溢れて来る。

「つ……」

「棗……終わりだよ。もう……終わった

「リヴィ……ありがとう。でも……か、お別れ言わなきゃ

「そうだな……。行こー！」

今にも時間断層に消えて行きそうな一人の背中を追った。

「亨ー！」

「ステイーーー！」

『またなー！』

一人も応えた。

『来世でまた逢おう！……』

大丈夫だよ。
もう大丈夫。

歩いて行ける。

その後俺達は普通の生活に戻つて行つた。
長い期間彼方の世界にいたにも関わらずこいつの世界では入学式の
次の日。

それからの日々が経つのは早く、いつの間にか卒業式を迎えた。
あの日から三年間。
亨の事を覚えている者は俺と水城以外には居なかつた。
卒業式が終わつてふと思ひ出す亨の姿。

「あーやばい。俺泣きそー」

「どうしたの棗？卒業が悲しい？」

「いや、違くて。ただ……」

その時、声が聞こえた。

『また……な。棗』

アイツの姿が一瞬、見えた気がした。

「棗？」

ずっと……空を見つめていた。

「亨一ーまたなーーー！」

大声で青空に向かつて叫ぶ。
思いつきり笑い声が響いた。

それからいつか、何処かの中学校。

「いーおーりー！」

そこに伊織いおりと呼ばれた少年がいた。

「何だよ愛めぐみ」

「えへへー。今日から中学生だねー。」

「そうだな。・・・ん？」

「どしたの？」

「いや、アイツは？」

「転校生だつてー。つて伊織ーー？」

何かに引き寄せられるかのよつこ、伊織は一人の少年の元へ向かつた。

「なあ、君転校生なんだつて?良かつたらそ、俺と友達になんねえ?
?」

振り向いた少年の顔を見て、一瞬懐かしこと重なつ感情が走った。

「亨……？」

「棗……？」

一人で言葉にして、慌てて口を塞いだ。

「えー？ あつ悪いー！」

「いや！ 僕も……！」

「……あのや、変だつて思わないで聞いてくんねえ？ 僕さ、君を見た時頭ん中で、『やつぱり俺と亨が出会つたのは、運命だつたんだ』って声が聞こえたんだよな。……つて思いつ切り変な奴みたいじゃんかー！ ゲメン。今の忘れ

「

「つうん。良いよ。僕もね、頭の中で声が聞こえたんだ。『久しづりだね、棗』って。二人とも何処か可笑しいのかも知れないけど、でも聞こえたよ？」

「そつか。俺の名前は松永 伊織。宜しく」

「僕は斎藤 雨龍。雨龍つて呼んで」

微笑んで握手をした。

ほつり、やつぱり。

『俺と亨が出会つたのは、運命だつたんだ』

『久しぶりだね、棗』

『もうすっかり友達で居られるな』

『ああーすっと一緒にー』

聞こえた。

優しい声。

穏やかな会話。

「俺達、棗さんや亨さんみたいな親友になれるとな良いな！」

「やつだね！」

今度はすっと一緒にー

\$ \$ \$ \$ \$ \$ \$ \$ \$ \$ \$

『貴方の周りにも、数々の輪廻があります。そして輪廻の輪とは永遠に続くもの。ですから今日も、何処かで廻り続けている運命があるかも知れません。ほら、貴方のすぐ隣でも、貴方に無関係な者など居ないので。いつか私も、貴方にお会い出来る日が来るかも知れません。廻る運命の輪の中で。その時まで、暫しのお別れです。また逢える日まで』

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6877/>

輪廻～廻る運命の輪～

2010年10月14日12時04分発行